

---

# ありがちな魔王と勇者の日常とかそんなの

とりすた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ありがちな魔王と勇者の日常とかそんなの

### 【Nコード】

N5809U

### 【作者名】

とりすた

### 【あらすじ】

「魔王よ、時が来ました。長年の決着を、今！ここでっ！」  
「間に合ってます」 追い返された。（第一話「勇者、魔王に追い返される」より抜粋） 人族と魔族が争っていた時代より二千年以上たった現代。世界はそれなりに平和でそれなりに危険な感じで安定していた。そんな世界での女魔王と女子高生勇者の日常。ほのぼのたまたにシリアス、多少の風刺で構成されています。 1ジャンルをコメディからファンタジーに変更しました。 2当拙作のキーワードを募集しています。感想欄に書かれたキーワードを随時追

加していきます、よろしくお願いします。

## 勇者、魔王に追いつ返される

「ここですか」

「はい、間違いありません」

ボロいアパートの前で住所を確認するのは、白磁のような肌に黄金のような髪、そしてとがった耳を持った女性。いわゆるエルフ。

その長寿と積み重ねてきた知識を持って賢者の一族と呼ばれた種族だが、色々あって、今は普通の人となっていた。

「では参りましょう」

錆た階段を軋ませながら昇るのは、華美な鎧姿に身を固めた、流れる黒髪をもつ女性。

いわゆる勇者。

人族の最高戦力として生み出された血族だが、今は色々あって飾りの王族となっていた。

いまだき見ないような呼び鈴を押す。ジーという古臭い音のあとドアが開かれ、住民が顔をだした。

眠そうな住民に、勇者は畏怖堂々と宣言する。

「魔王よ、時が来ました。長年の決着を、今！　ここでっ！」

「間に合ってます」

追いつ返された。

遠い遠い昔、世界は二つに別れていた。  
人族と魔族。

それぞれの陣営につく種族。

血で血を洗い、地と地を取り合う悲惨な戦争。

生き残りをかけた壮絶な殲滅戦。

千年かけた大戦争は、人族の勝利で終わった。

肉体的に魔力的に優れていた魔族だったが、魔法によらない兵器、  
科学技術のまえに敗れ去った。

魔王は降伏し、魔族は講和し、魔物は消え去った。

だが、世界は平和にはならなかった。魔王を倒しても、人は人で  
しかなかった。

魔王の恐怖が支配していた時代は終わり、群雄割拠の時代が訪れ  
た。

そして五百年がたった今。

複雑な経緯と単純な理由で、それなりに平和でそれなりに危険な  
感じで世界は安定していた。

「……………」

「……………」

目の前で閉じられたドアを前に立ち尽くす二人は、見合わせた後、  
もう一度呼び鈴を押しした。

「さっきからなんですか、勇者なら間に合ってますよー」

再度でてきた住民は、勇者と違いジャージ姿だった。

ボロアパートには、勇者の鎧よりは似合っている。

軽くウェーブがかかった赤髪ごとぼりぼり頭をかきながら、心底めんどくさそうな表情を浮かべる女性に、勇者はおずおずと問う。

「えっと、黒岩累子さんはご在宅でしょうか？」

「私ですけど……なにか？」

勇者は「パアア」という擬音が付きそうな凄い笑顔で言い切った。

「私は37代目勇者、天王維委！ 魔王よ、いざ尋常に、勝負っ！」

「人違いです」

ドアが閉められた。

「……………」

「……………」

「ふむ、人違いでしたか」

「いえ、あつてます。表札にもちゃんと『くろいわ るいこ』とあります」

しかもひらがなで。郵便屋さんも間違えようがない。

「……………私は、なにか失礼なことをしたのでしょうか？ それで魔王さんが気分を害した……………とか」

「気分どころか命を害しようとしている立場ですけど、私たちは

「……………」

「今日は帰りましょう」

「……………」

魔王と勇者の、歴史的でも劇的でもない日常は、こうして始まった。

「次は手土産でももってきてきましょう。お菓子とか」

「そうね。日持ちするので、あまり気を使わせないようなのにしましょ」

勇者、魔王に追いつ返される(後書き)

魔王の名前 黒岩 累子は「くろいわ るいこ」と読みます  
勇者の 天王 維委は「てんのう いい」です

## 勇者、魔王に逃げられる

暖かな春の日差しの中、公園でドワーフの親子が鬼ごっこをしていた。

貴金属への愛と知識で科学技術を支えてきた種族だが、色々あって、今は普通の人となっていた。

走るドワーフの子供を見ながら、ワーウルフのカップルが「あんな子供が欲しいね」「うん」と愛をささやいていた。

獣の力と人の知性、月夜を疾走する戦士の一族。だが今は、やっぱり色々あって、普通の人になっている。

「今日こそ勝負です、魔王！」

そんなのんびりとした昼下がりの公園に、勇者……維委の音が響き渡る。

ベンチに座って本を読んでいた魔王……累子は、やっぱりジャージ姿だった。

あちらこちらで「わー、王女様だー」「きれいー」「税金の無駄使いだよなあ」などという声が聞こえてくるが、維委は一切を無視した。

「人違いです」

「あなたが黒岩累子さんであることは、しっかりと確認いたしました！ ゆえに勝負です！」

「やだ、めんどくさい」

累子はそういうと、本を読み始めた。髪と同じ赤い瞳は、あっさ

りと維委から視線を外す。

「せめて、コレを読み終わるまで待つてよ」

「わかりました」

「わかつちゃうんですね、姫様……」

焼き菓子の詰め合わせを抱えるエルフが嘆息した。

天王家に仕えて長い彼女は、維委が世間知らずかつ素直なところ  
に一抹の不安を感じながらも、ハンカチを敷き「こちらにどうぞ」  
と維委にベンチを勧める。

従者である彼女は当然座る気などなかったが、維委がポンポンと  
自分の隣を叩くので仕方なしに座った。

主人の好意を無下にするのも、失礼にあたると考えたから。  
ベンチに座りながら「まだかまだか読み終わるのはまだか」とい  
った、マテをされた犬のような維委にまたため息を吐く。

そして、こつそりと累子を盗み見る。

彼女が読んでいる本の背表紙には『大西洋大決戦！シリーズ 超  
魔級空中要塞戦艦あらわる！』とかかれてあった。

どうも超兵器モノや架空戦記モノといった小説らしい。

当の本人が楽しそうに読んでいるのだから、突っ込むのは無粋だ  
が、敗戦側の魔王が読む物として正しいのだろうか？

「ふう………可変戦闘魔物サイコー」

小説内にでてきた変形する魔物の描写を思い出しながら、「ご満悦  
な累子にはいいいいっこりと笑った。

笑顔だけは魔王らしく黒いものを感じさせる。ジャージ姿だけど。

「読み終わりましたね？ もう一回読むのなしですよ？ いざ尋常にしよ」

「で、誰？」

勢いよく立ち上がり、勇者の剣を抜こうをする維委をあっさり無視し、エルフに声をかける累子。

「私は天王維委！ 37代目勇者で」

「いや、違って。そっちのエルフの人なんだけど」

「わ、私ですか？」

「うん。良い匂いがする」

その言葉に、色々と葛藤していた維委の表情が明るくなる。ちなみに葛藤というのは「私は影が薄いのでしょうか？」や「魔王に無視される勇者って」などである。

「今日はお土産を持ってきていたのを忘れていました」

「お土産？」

「はい。手ぶらでは失礼かと思い、我が家に仕えるパティシエによる焼き菓子などを」

「をを！ それはありがとだね、維委ちゃん」

「『維委ちゃん』っ!？」

勇者の一族は色々あって、飾りとはいえ王族となっている。そんな一族に産まれた彼女にとって、家族以外から「ちゃん」付けで呼ばれたことなどなかった。

さらにいうなら、友達呼べる相手もいなかった。

畏怖され敬意を受ける者、高みに立つ者、それが勇者。対等な者がほとんどいない。対等でなければ、友情などなかなか育たない。対等でなければ、友情よりも利害が先に来ってしまうから。

「うん、維委ちゃん。ちゃん付けは駄目かな？」

「いいえっ、是非是非そのままです」

家族以外には、従者か、敵か、護るべき存在しかもたなかった維委。

そんな彼女にとって、「維委ちゃん」と呼ばれることは、あきらめていた幸福が手に入るかもしれないという予感を与えていた。

彼女は友達が、本当に、本当に、友達が欲しかった。

「うん、わかった。お菓子ありがとねー。維委ちゃん、またねー」

「はい、またお会いしましょう」

友人との再開の約束「またね」、これがどれだけ嬉しいことか。しかもまた維委ちゃんと呼んでくれた。

維委は感動に身体を震わせ累子を見送った。

ああ、この感動をわかちあいたい！ 私がこれほどの喜びを得ていると、世界中に知らせたい！

「あの、姫様……」

「はい、なんでしょう。私は彼女と友達となったこの感動をあなたにも分け与えたいと考えていますが、どうすればよろしいのでしょうか？」

「魔王さん帰りましたけど、決着はどうなさるので？」

「あ」

「さらに言わせていただきますと。二度しかあっておらず、手土産を渡しただけの間柄は、友達と言いつれぬのでは？」

「で、では、累子さんと私の関係は、何になるのですかっ?!」

従者は妙なテンションになっている維委を華麗にスルーし、事実を淡々と告げる。

「せいぜいが知り合いといったところですか」

「ううう、私、初めて友達ができたと思ったのに」

「友達というより仇敵、では？ 勇者と魔王ですし」

「友達より先に仇敵ができるなんていやですうううっ!」

泣き崩れる維委。絶望は希望を得てからのほうが深いというのは、本当のようだ。

維委を追い込んだ従者は、姫様を連れて帰るのに自分だけでは大変だと判断し、周辺にいるはずの警護に手を振る。

泣き崩れる維委に嘆息する彼女こそが魔王じゃないのかと、警護員が思ったとか思わなかったとか。

**勇者、魔王に逃げられる（後書き）**

超魔級空中要塞戦艦の元ネタは、超時空要塞マクロスです  
可変戦闘魔物は当然ヴァリアブルファイター（VF）が元ネタ……  
とみせかけて、実はヴァジュラです

いいよねマクロス

## 魔王、罽をしかける

天王維委は勇者である。

勇者の一族の直系であり、現国王でもある父親から直々に勇者の剣を継承している。

その際に兄の「ごめんな維委、ちょっと研究が忙しくてさ」とか、姉の「剣振ると、二の腕が太くなるのよねえ」といった声が聞こえたが、気にしてはいけない。

気にしても勇者は勇者なのだから、気にしないほうが精神的に良い。

そんな彼女は16であり、花も恥らう未成年である。

未成年が平日の朝というと、寝坊か通学と相場が決まっている。そして維委は、寝坊などしたことがなかった。

彼女は勇者の名においての無遅刻無欠席を誇っていた。

「をを、維委ちゃんじゃないか」

余裕を持って通学している維委の前に、ひよっこりと累子が現れた。

「おはようございます、魔王さん」

驚きながらも礼儀正しく頭を下げる維委。流れる黒髪をついとおさえる指先がお嬢様育ちだと感じさせる。

従者も同じように「おはようございます」と頭を下げる。通学に従者が居るというのもさらにお嬢様っぽい。

実際にお嬢様というか、お姫様なのだから当然だが、ここまで定

型のお嬢様というのも珍しい。

「やだな魔王さんだなんて。累子でいいよー」

「名前で呼び合うなんて……友達でないと許されないはずでは……」

維委は従者より「友達であれば名前で呼び合えますが、知らない人から呼ばれるのは不快感しか与えません」と教育されていた。

間違っではないが、厳しすぎる気もする。友達ができない一端は、こつした堅苦しい教育にあるのかもしれない。

「何言ってるの、友達とかどうとか」

「そうですね、私と魔王さんは……」

怪訝そうな累子の表情に、落ち込む維委だったが、

「魔王じゃない、累子。……私たちはもう、友達でしょー」

との累子の友達宣言で法悦の域に突入した。

先日、絶望は希望を味わってからのほうが奥深いと実感した維委であったが、逆も真なりと新たに学んだ。彼女が学ぶべきことはまだまだ多いようだ。

お花畑で手をつなぐ自分と累子という絵で占められている彼女の脳内には、あまり新しい事柄は入らないように思えるが。

トリップする維委に従者は嘆息するが、累子は笑う。  
素直でかわいくて楽しい子だと。

「維委ちゃんのその制服って、御門高のだよねー。頭良いんだ」

緋色の少し丈が短い特徴的なブレザーと、ひざ下まであるチエツクのスカートをくるりくるりとひるがえしながら回転する維委に、累子はスルースキルを遺憾なく発揮した。二千年以上生きていると、多少のことでは動じなくなってしまうものだ。

ちなみに御門高とは宮内省の外局として設立された、官立御門院高等学校の略称である。

幼年舎から大学まであるマンモス校であり、進学コースの偏差値はびっくりするほど高い。

「え、ええ、はい。私の一族は、御門院に学ぶのが慣わしですから」「そっかー勇者だもんねー。王族だもんねー。学生さんも大変だ」

キャツキャウフフな妄想から戻ってきた維委に、妙に年寄りくさいことをいう累子。

そんな累子は今日もジャージ姿だ。

維委の衣装係も兼任している従者からすれば、見目麗しいのだから、すこしは着飾ればよいのにと思わなくもなかったが、口にはしない。怖いから。

「いえ、私はまだまだ未熟者ですから。……る、累子さんはこれからどちらに」

「んー？ 私は日課の図書館通い」

ほら、向こうにある王立図書館。と指差す。

「あそこって、色々置いてあっておもしろいのよねー」

「はい、私もよく利用します」

「そうなんだ。じゃあ、私を書いた本を読んでもかもしれないねー」  
「作家さんだったんですか?」

「作家じゃないよー。『核撃魔法に二重圧縮と三唱和が必要なわけ』とか『やさしい竜の味噌煮込みのつくり方』とか『靴下から脱がすのが美学、靴下だけ残すのがエロス』とかだもん」

「うーん。読んだことないです、今度探してみますね」

最後二つはともかく、核撃魔法に関する書物は全て禁書扱いだから確実に見つからない。一般人が等一級戦略魔法を放つ世界は、そう遠くないうちに滅びると思う。

最後の二つにしても、靴下のエロスについて勉強しても仕方がないだろうし、絶滅危惧種な竜を味噌煮込みにしてしまったら駄目だろう。

「立ち話もなんだし、そのベンチに座ろっか」

「そうですね」

二人が居る街は千年都市と言われる歴史ある古都であり、世界中から観光客が訪れる観光都市でもある。休憩用のベンチはいくらでもどこにもある。

累子のはんびりと、維委はいそいそとほほを染めながら腰を下ろす。

それからは学生生活や、遺失魔法、3分クッキングなど取り留めなく語り合った。

重要なこと他愛もないこと、そういった区別は二人の間にはなか

った。ただただ話し合うという行為が楽しかった。  
従者は妙なことを吹き込まれないかと冷や冷やしていたが、  
二人はまったく気がつかなかった。

「累子さんは凄いですね。学校にもこんなに博学な先生はいません  
よ」

「まあ、伊達に長生きしてないからねー」

遠くからチャイムの音が聞こえ、二人は一区切りつける。のども  
少し渴いてきたし。

「そろそろ図書館も開くし、私、行くねー」

「はい、またお会いしましょう」

「またねー」

友達つて、やっぱり素晴らしい。ただ話す、それだけのことがこ  
んなにも楽しいなんて知らなかった。

維委は立ち去る累子にひらひらと手を振りながら、友達ができた  
喜びをかみ締めていた。

「嬉しそうですね、姫様」

「ええ。いまなら空もとべそうな気持ちですよ」

「空を飛べたら、なんかよかったかもしれませぬ」

「…………？」

従者の意味不明の言葉に小首をかしげる。

再び遠くのでチャイムがなるのを聞いた維委は、血の気が引く音も聞いた。

「先ほどの予鈴で、今のが本鈴です。飛んでも無理でしたね」

「か、皆勤賞が…………」

「……」愁傷様です

勇者の名において誇っていた無遅刻無欠席は、魔王の名においてあっさりと止められてしまった。

図書館への道のりで、累子が「かかかか」と厭らしく笑っていた。

魔王、罽をしかける（後書き）

官立御門院高等学校の元ネタは学習院です

制服はオリジナル設定ですけどね

ここまでいうと、ピンと来た人もいるでしょうが、不敬とかいわないでくれると嬉しいですよ  
そんな気持ちはないです

国旗掲揚も国歌斉唱も、もっとするべきだと思っています  
本当ですよ？

## 魔王、ケーキを焼く

「見つけましたよ、累子さんっ!」

買い物客で混雑する午後の商店街で、完全武装な維委が声を張り上げる。

勇者の剣を抜き放ち、身構え、歓声と拍手で受け入れられる維委。何故なら従者と警護員が「はい、ここから前に出ないでね」「危ないですから、ロープ踏まないでください」と周辺の安全に配慮しているから。

ちよつとしたイベントになってしまっている。おひねりも飛んできそうだ。

「今日は絶対に逃がしません……皆勤賞の甲い合戦です。いざ、尋常に勝負っ!」

勇者の剣を突きつける。研ぎ澄まされた刃が陽光を反射し、累子の顔を照らす。しかし当の累子は、

「いやー。良いタイミングだね、維委ちゃん」

と紙袋を両手で抱えのんびりと笑う。

やっぱりジャージ姿である。

「クッキーおいしかったよ、ありがとねー」

「お口に合ったようで良かったです。お気に召したのであれば、また……って違います!今日は誤魔化されませんよ」

「お礼にケーキを焼こうと思ってるんだけど、一緒にどおー？」

「一緒にお菓子作り……いや、でも……友達と一緒にケーキ」

誤魔化されはしないが、葛藤はするようだ。

「……何ケーキですか？」

「んー？ 簡単に、季節のフルーツ入りで、生クリームたっぷりなやつにしようかなー、と」

「今すぐ着替えてきますので、待っていてくださいっ！」

決闘騒ぎにはならないと判断した警護員が撤収準備をはじめ。

中々に手際がいい。

そこから一人従者が離れ、維委に耳打ちする。

「勝負はよろしいのですか？」

「明日に持越しします」

ケーキで誤魔化されはしなかったが、釣られはしたようだ。

だって維委も女の子なのだから。甘いものが嫌いな女子はいませ  
ん。

従者はそつとため息をついた。

「じゃあ、まずスポンジを焼きまーす。維委ちゃん、これ泡立てて

」

場所は変わってボロアパートの一室。つまり、累子の部屋だ。物が少なく、さっぱりとした印象を与えている。キッチンには小奇麗にされていた。少し意外。

「はいっ！ お任せください」

維委は制服の上に、フリルがかわいいエプロンを着込んだ姿で腕まくりした。

従者もいつものスーツ姿から、エプロンドレス姿にフォームチェンジしていた。空気が読める従者である。

「では、いきます！」

全卵にきび砂糖、蜂蜜、水あめをいれたボウルに、勢い良く泡立てを突っ込む。そして電動ミキサーもかくやというほどにかき混ぜ始めた。

結果、材料は見事に飛び散り、エプロンをまだらに染めた。

「ちょっと予想外」

「……」

「……」  
「ごめんなさい」

順に累子、従者、維委である。

「そんなに力をこめなくていいから。……今度は生クリームをお願いしていいかなー？」

「……はい」

ボウルにとぼとぼと移し変えた後、維委に渡し、びわ、メロン、さくらんぼを切り分けようとする累子。

すると「きゃあ」というかわいい声とともに、目の前に生クリームが落ちてきた。

失敗しないようにと思えば思うほど緊張し、手を滑らせたようだ。

「……ここできたかー」

「すみません、すみません、すみません」

「まあ、コレに関しては予想してたけどねー」

それから……。

バターを溶かそうと熱湯を直接注ぎ込みむ。

卵は割れるものの、殻の半分以上が混ざる。

粉をふるいにかけてようとし、くしゃみを連発する。

維委は全ての作業で失敗し、材料を無駄に消費していった。

従者は無言で掃除していたが、内心で「もうやめて、姫様のHPはもうゼロよ」と突っ込んでいた。

突っ込まずにフオローしろよ、と思うのは間違いではない。間違いではないが、顔にナマな生地を張り付かせ、頭から粉をかぶった可哀想な格好で憔悴している維委に声をかけるのは、それなりに勇気が必要だろうから仕方がない。

「ここまでされると、見事としか言いようがないわねー」

「……」

維委の肩がピクリと震える。

「大丈夫だよ、維委ちゃん」

そうつぶやくと、冷蔵庫から箱をとりだす累子。

「こんなこともあるうかと。昨日のうちに作っていたケーキがこれです」

某3分クッキング張りにいままでの工程や、維委の努力を無にする累子であった。

どや顔で胸を張る累子に、維委が抱きついた。

「累子さんごめんなさい」

涙声であやまる維委の頭をなでながら、累子は本当に可愛い子だと笑う。

「お茶を淹れとくから、頭洗ってきなさいな」

## 魔王、ケーキを焼く（後書き）

生クリームは冷やすと角が立ちやすいといいますが、実はもっと簡単な方法もあります

ほんの数滴のレモン汁と入れると、即効で固まります

ちょっと調節が難しいですが、すっごく楽です  
一度お試しください

従者、お願いする

一時間後、ケーキが美味しく嬉しかったのと、失敗続きで情けない気持ちでいっぱいになった維委は疲れて、ソファに寄りかかりながら寝入ってしまった。

累子は食器を、従者は汚れた壁や床の掃除をしながら雑談を楽しんでいた。

「寝ちゃったねー。私……魔王の前で」

「それだけ魔王さんを信頼している証かと」

「勇者が魔王を信頼したらダメでしょうにー」

「平和でよろしいのでは」

穏やかな表情だった従者の顔が、きつくなる。

「……平和、ですか」

自分の発言に、とても嫌な味が混ざってしまう。

これから起きること、自分ではどうしようもないこと。仕方がないこと。仕方がないと動けずにいる自分。

それがとても情けなく感じる。

「大丈夫だよ」

累子は従者に向き合い、安心さすように笑う。

「魔王の私がついて、勇者の維委ちゃんがいる。だから大丈夫」

にいいいと、口角をあげる赤子が泣きそうな笑顔。安心させようとしているようには見えないが、累子的には優しく微笑んでいるつもりなのである。

それが判る従者は、累子の内心と、その笑顔のギャップについて吹き出してしまった。

「ありがとうございます、魔王さん」

「どういたしまして。……それよりもさー」

雑巾をもつ従者の手をとる。

すると累子がふれた場所から、肌の色が変わっていった。

白磁のような透き通る白さから、黒曜石なつやのある褐色へと。

「この国はそんなに人種差別はひどくないと思うんだけど？」

「……いつからお気づきになられてました」

「んー？ 自分とこの眷属に気付かないで王は名乗れないわよー」

エルフはエルフでも、従者はダークエルフだった。

魔王に付いた種族のひとつ、その魔力の強さと残虐さで名をはせた一族。

色々あったが高いプライドが邪魔をして、普通の人にはならず闇に隠れ、あまり人には言えない過激な活動を行う一族になってしま

っていた。

ひどい国では、ダークエルフというだけで禁固刑という法律もある。

つまりダークエルフは、世界中からその存在を忌避されたのだ。

「私はダークエルフです」

「うん、わかってる」

「人の世にまつろわず、険しき道を行くことを選んだ我が種族ではありますが、天王家の皆様は私共を受け入れてくださいました」

「ああ、そっちの族長にお誘いがあつたんだってね？」

それはまだ戦乱が終結したばかりの混乱期の話である。

流浪の民となったダークエルフに、日出の国が移住を持ちかけたのだ。

世界中どころか国内からもダークエルフの移住が問題とされたが、当時の国王が「みんな幸せになるうよ」と言って事を治めたという逸話がある。

ちなみに国外へは「やるならもう一回やるぞ、コラ」と恫喝したらしいが、それはあまり知られていない。

「はい。その恩に報いようと仕えておりますが、この肌は邪魔なのでいじります」

「ま。あの一族はともかく、周りは煩いだろっねー。慣習がどうとか、伝統がどうとか」

「はい。魔王陛下、このことは御内密にお願いいたします」

「維委ちゃんは知ってるんだよね？」

「はい、姫様が幼少のときにお伝えいたしております」

「ならOK」

頭をさげる従者に、累子は軽く答える。

「あの一族のことだもん。『よかったウチにこない？』とか軽いノリで誘われたんでしょう？」

「御明察の通りでございます」

「それで苦労するのは、周りなのよねー。昔っから」

二人は寝こける維委を見て累子は笑い、従者は嘆息する。その寝顔はとても幸せそうだった。

「ありがとうございます、魔王陛下」

再度深く頭を下げた後、「そして」と姿勢をただし正座する従者。手を床に着き、両の人差し指と親指でできた三角に額をつける。

「どうか、姫様を。どうかどうか姫様を、よろしくお願いいたします、魔王陛下」

誇り高き種族がする土下座。それに対し、累子は姿勢を正して答える。

「うんOK」

凄く簡単に受け止めた。

魔王は、ボロアパートでケーキを焼きながら女の子の願いを受け入れる。それは世界を支配しかけた時から変わらない態度。

相手が誰でも、そこが何処でも、累子は常に累子だ。

累子にとっては、世界征服も女の子の幸せもまったく同じ「OK」の一言で始めることができるものだった。

親から伝えられていた通りの魔王の態度、そんな累子に従者は「あはっ」と笑った。

「それはそうと。余ったケーキだけど、外に居る警護の人にも分けてあげてねー」

「御意思のままに、魔王さん」

従者、願ひする（後書き）

日出の国は「ひでのくに」とお読みください  
ま、日本のことです

あと、初めて予約掲載を試してみます  
うまくできるといいな

世界、いつも通り

「いい天気だねー」

「そうですねえ」

春の陽気に、気持ちだけでなく声まで溶ける。

女子高生勇者とジャージ魔王は、公園のベンチで日向ぼっこしていた。

「眠くなるねー」

「ですねえ」

いつも通り累子に勝負をもちかけた維委だったが、いつもの通りに累子にはぐらかされ、今は二人でのんびりしていた。そして背後では、いつも通りに従者が嘆息している。

「平和だねー」

「はい。平和ですう」

休日の昼下がりに、公園では色々な種族の家族が団欒している。

二人の目の前では、トロールの警官にゴブリンと人族の子供たちがじゃれついていた。

トロール。それは火か銀の武器でないと、傷ついてもすぐに回復する巨人の一族。色々あって普通の人になり、その特性を生かして警官や軍人として活躍している。

ゴブリン。昔は子鬼と呼ばれ、闇と血を好む性質から忌み嫌われる種族だったが、やっぱり色々あって普通の人となっている。

「ところで、維委ちゃん」

「はい。なんですかあ」

「あれをどう思うー？」

累子は目の前の光景……ではなく、公園の外を指差した。

ボールを追いかける幼女。それだけならば何も問題のない、よくある風景だが。

だがそこは幹線道路であり、後ろには2tトラックが迫っていた。

（いけないっ！）

維委は即座に飛び出した。

強化された筋力による全力行為にベンチが壊れ、累子が「きゃあ？」と似合わない悲鳴を上げたが気にする余裕はない。

幼女の横にアスファルトを凹ませながら着地したはいいが、何もできないことを悟る。

幼女のひ弱な身体では維委の全力に耐えられない。

トラック運転手がやっと気づき、ハンドルを切るうとしているが間に合わない。

（せめて命だけは！）

怪我をするのは防げなくても、自分がクッションとなれば、命は助かるはず。少しでも衝撃を和らげようと幼女を抱え込む。

即断し覚悟した維委は、目をつぶり身体を硬くし、衝撃に備える。

しかし、その衝撃はいつまでたってもこなかった。

(……………あれ?)

その代わり、維委の努力や覚悟をいつも無駄にする、いつも通りの気の抜けた声が出てきた。

「維委ちゃんは馬鹿だなー」

恐る恐る開けた目に映る光景は、ちょっと信じられないものだった。

累子が2台トラックを垂直に、しかも片手で持ち上げていた。

いくら魔王といっても、見た目は普通の女性であり、その細腕でトラックを支えている状況は、異様としか言いようがない。

「とりあえず、その子を持って行ってよー。さすがにちょっと重いー」

その言葉とは裏腹に、何があってもびくともしなさそうな雰囲気だが、こくこくと頷き公園に急ぐ維委。

そのころ、やっと公園の人々が騒ぎ出した。

女性がトラックを持ち上げている光景を見て、騒がないほうが難しいが。

「おじさんー。携帯しながらの運転はだめだよー?」

後続に気を使いながら、累子はトラックを路肩に降ろす。

オーガの運転手は目を白黒させながら、大きな頭とを膨らんだ腹ごと何度も頷き、トラックを発進させた。彼はもう二度と携帯片手の運転はしないだろう。

昔は人食いとおそれられ、大きな頭と強靱な身体をもつ、臆病で凶暴な一族だったオーガ。だがいつもの通り、今は普通の人になっている。

累子がのんびりと公園に戻ると、そこでは維委がちよつとしたヒーローになっていた。

子供をトロールの警官に預けた維委は、周囲からの賞賛の声にちよつと照れながら対応していた。

「姫さまかつこいー！」

「うん、すつごくはやかつた！」

「女の子が無事でよかつたです」

「警護の者の苦労も考えてください」

「やっぱり天王家の人たちは違うねえ。凄いよ！」

「天王万歳！」

「ばんざーい！」

「ばんざーい！」

頭部が寂しくなりつつあるお調子者のおじさんが始めた万歳の唱和が、さらに維委を照れさせる。あと警護員の愚痴も聞こえたが、その前に働け。

累子が近づくとさらに盛り上がり、万雷の拍手が巻き起こった。

「Your finger, monster! (手を放して化

け物！」

しかしそれは、良く言えば響き渡る。悪く言えば耳に障る金切り声で止められた。

叫んだのは、人族の女性。彼女は顔を蒼白にしながら、鬼気迫る勢いでトロールの警官に詰め寄っていた。

「Mom! (ママ!)」

警官にあやされていた少女はそういつて、母親に走っていった。娘を抱きしめた母親は、警官を睨みつけた。

彼女は、警官にあやされて笑顔だった娘の笑顔を見ていなかった。いや、見ていたが、認めたくなかったから無視したのだ。見たくないものは見えない、それが人間。

「Do not touch the girl monster!  
! (私の娘に触らないで、怪物!)」

人族。圧倒的な繁殖力で世界を支配し、民主主義という数の暴力をもつて昔から現在まで、差別主義の最右翼な種族。

彼女の発言は、これ以上ないほどに魔族差別主義者だと表明していた。

しかしこれは珍しいことではない。

珍しいのはこの国なのだから。

日出の国は天王の下での平等が憲法に明記されている。天王の下、種族の違いでの差別をなくし、和を持って尊しとする「全族共和主義」。

そこにはダークエルフだけでなく、魔族全てが含まれる。皮肉なことに、魔王と戦った勇者の国だけが、全魔族を受け入れている。つまり少女の母親の発言は、世界的に見てとても一般的なのだ。

しかしここは世界で唯一の、全種族の人権が保護されている国。日出の国。

その場の人すべてが、母親を睨みつける。外国語が不得意といわれる日出の国人でも「monster」という単語の意味と、彼女が放つ憎々しい空気は判る。

「I do. This country, I should not not come (な、なによ。こんな国にくるんじゃないかったわ)」

それは彼女にも伝わったようで、娘を抱き上げるとそそくさと公園からでていった。

「なんだよあの女。おめえさんはなーんにも悪かあねえぞ」

「礼のひとつでも言っていけばいいのにね。サンキューとか」

口々にトロールの警官に話しかける人々。

べらんめえ口調のおじさんが肩をたたこうとしたが、身長が足りず背中を叩いたのは「愛嬌」。

「いえ、いいんです。慣れてますから。……それに」

そう言いながら警官は、笑顔で手を振った。母親の肩越しに、警官に手を振る幼女に。

子供は敏感に良い人と悪い人を見分ける、牙が生えた怖い顔をしているけれど、優しい人だと幼女にはわかったのだらう。

警官にはそれだけで十分だった。

きつと彼は、これからも、愛される警官として職務に励むだらう。

「ダメよ、維委ちゃん」

「はい……わかっています」

しかし、ここにそれではよしとしない人間がいた。

「でも『しかし』『けれど』の思いは消えませんか……」

「今からそれだと、後々大変よー？ 成人したら、外国に表敬訪問とかしなくちゃいけないんでしょう」

「……………」

「正直、めちゃくちゃひどいわよ。マンホールチルドレンとか当たり前だからねー」

「……………」

魔族と人族を区別はするものの差別しない国、その王族としての維委は、あの母親の発言に悲しみと怒りを覚えていた。

なんとか自制してはいるが、ちよつとしたきっかけで爆発しかねないところまでできていた。

隣にいる累子がそつと手を握ってこなければ、あの母親に張り手をお見舞いするところだったのだから。

なにせ侮蔑されたのは自国民、それも法の守護者として警官として働く良民なのだ。これに怒りを覚えないのは、王族として許されない。

「どうすればよいのでしょうか……」

「そーいうのをなんとかしたいなら、世界全部ひっくるめて変えなきゃならないわよー」

累子の顔を見る維委。彼女は実際に世界を支配しようとしていた。変えようとしていたのだ。

維委の視線に気付いた累子は、いつも通りに、にいいいと口角を上げて笑う。

「ま、見ての通りになっちゃってるけどねー」

それを止めたのは維委の先祖。

「ま、今日はもうお開きにしましょうかねー」

「はい……では、また」

「またねー」

維委はぺこんと頭を下げるが、そこにはいつもの元気はなかった。肩を落としてトボトボと歩く。

累子はそんな維委と、従者や警護員たちに手を振って家路に着いた。

「……継いだのは、本当に剣だけかー」

赤毛ごと頭をかいて呟く。

その呟きにはちよっとだけだが、明るいものが混ざっていた。

## 世界、いつも通り（後書き）

タグに人種差別はないと書いてますが、それは、日出の国だけのことで

まあ、区別はありますけどね

巨人族と子鬼族は同じ椅子使えませんし、サイズ的にそこらへんも、もっと深く書きたいですねー

英語は機械翻訳なので、正確ではないです

視野狭窄をおこしているとさえ判ればいいかな、と

日本にも差別はありますが、まあ、他国よりは少ないかな  
黒人だけ入店禁止とかないですし

風俗店は大抵、外国人お断りですが

## 魔王と勇者、じゃれあう

「お許してください、私は大変な罪を犯してしまいました」

手を組み膝を着き、頭をたれる。

格好こそいつものジャージ姿だが、累子は目を閉じ沈痛な表情を浮かべる。

「さあ、あなた達も」

そばにいた子供たちに声をかけ、同じように謝罪させる。

「神よ、どうかこのようにおろかな羊である私たちをお導きください」

再度頭をたれる。

子供たちも累子と一緒に頭をさげる。  
落とし穴にはまった維委にむかって。

「つてあたりで許してくれないかなー？」

「とりあえず、助けてください」

そこには地面から上半身だけ出して、片肘ついてむすつとしている維委がいた。

先週の外国人による中傷発言以来、累子の前に姿を見せなかった維委であるが、今日は久々に勝負を持ちかけてきた。

それはもうとても元気に、いつもの公園に「勝負ですっ！」と駆け込んでくるほどに。

駆け込んできて、勢い良く落とし穴にはまり「ぷきゃ?!」と婦女子にありえない悲鳴を上げるほど元気に。

勢いが良かったために落ちた後、落とし穴のフチにぶつかり、反動で後頭部をぶつけていた。

その姿は若手の芸人に見習わせたいほどだった。

金タライがなかったことが、残念だ。とてもとても残念だ。

「いやー、ここまで見事に決まるとは思わなかったよー。そう意味でも誤っちゃおう」

「なんだか、字が違う気がします」

「気のせい木の精」

維委を引つ張りあげながら、鎧についた土を払う累子の周りで、子供たちが泣きそうな顔をしていた。

累子と一緒に落とし穴を掘った子供たちである。

いまどき見ない古典的な遊びに、喜び勇んで穴をほっていたが、ターゲットが維委とは知らなかったようだ。

それに気付いた維委は目線をあわせて「子供は元気が一番です」と笑う。

「でも危ないから、もうしちゃ駄目ですよ」

安心して笑顔になる子供たちの頭をなでる維委。しかし注意は忘

れない。

車一台がすっぽりはまるような落とし穴。危険うんぬんというより、良く掘ったものだと感じてしまう。

「大丈夫。勇者にしか反応しない障壁張ってるから、関係ない人は落ちないわよ」

「ちやかさないください累子さん。私だから良かったけど、他の人なら……って落ちない？」

「本当です姫様。……凄い、見たことないですよこんな術式」

落とし穴の上に立っている従者が感嘆する。

一見すると宙に浮いているか、透明度の高いガラス板にたっているように見える。が、違う。

従者の足裏には地面の凹凸が感じられた。何も無いのに、だ。

「真上にいるのに、仕掛けの痕跡も……いえ、発動している波動すらない。隠蔽結界……？ でも違和感がまったくなさすぎるし」

ぶつぶつと自分の思考に落ち込む従者に、累子はVサインをだして胸をはる。

「暇だったから、ちょっと凝っちゃった」

「……そう考えると、無駄にレベルの高いイタズラですね、コレ」

あまり魔術素養がない維委には「イタズラ」でとまっているが、こっそりと見守っている警護員達は青ざめていた。

累子だからこそイタズラですんでいるが、これが罠なら？ 誰に

もわからない罫、それを防ぐ方法はない。

今回のも殺意があれば……地雷など持ち出さなくてもいい、ただ包丁を敷き詰めておけばいい。毒などは何処でも手に入る。それを塗っておけばさらに殺傷力は跳ね上がる。

警護隊長は最低でも上級魔術師資格持ちの隊員の増員を考え始めた。

「なんにせよ、元気そうではよかったよ」

「……先日は、見苦しいところをお見せしてしまいました。すみません」

「見苦しくはないわよー、世間に憤るのは若者の特権だもん。うーん、青春だねー」

ビシッと親指を立てる累子。

「今日はなんだか、いつもと違いますけど。良いことでもありましたか?」

いつもより高いテンションの累子に、維委は少し困惑を覚えた。

「維委ちゃんが見事に罫にかかりましたっ!」

「愚問でした……」

困惑は解消したが、変わりに怒りが沸いてきそつだ。

「まあまあ。そう言わず、今日もお喋りしようよー」

ベンチに向かって歩き出す累子、それに付き合いながら笑顔になる維委。

自分を心配してくれて、方法はともかく、元気つけようとしてくれたのだ。嬉しくないわけがない。

(やはり、友達とは良いものですね)

するとベンチの一步前で、累子が立ち止まる。

不思議に思いながらその一步踏み出した維委は、地面に飲み込まれた。

「二回も落とし穴にはまってくれるなんて、さすがよ維委ちゃん！そこに痺れないし憧れないっ！」

すっぽりと頭まで落とし穴にはまった維委。

今度のは先ほどと違い、幅は狭いものとても深かった。

さすがにあせった従者や警護員が引張りあげようとする。

しかし穴に近寄ると、じりじりと後退し始める。

穴のそこから発せられる殺気、そして不気味な笑い声に威圧されたから。

「ふふふふふふふふふうう、るーいーこーさーんー」

のそり。

「あーっはっはっはっはっは、何かな維委ちゃん」

某井戸の女幽霊のように這い出てくる維委は、なんとなくしに怖かった。

応える累子は珍しく、歯を光らせながら笑い返した。

「さすがに、やって良いことと悪いことがあると思っつンデスヨ」

「だって私『黒い悪い子』だもん」

一瞬にして空気が冷える。固まる。張り詰める。

「勝負です魔王っ！ 私が勝ったら6時間説教コースですっ！」

「お断りしますっ！」

一歩目で音速を突破し、雲を引く維委。

それに対して、赤熱化しながら急上昇する累子。

高密度化した大気が周囲を襲う。

音が衝撃そのものとなって、公園内を暴れまわる。

従者が緊急展開した防御結界が、数瞬で限界に近づく。

魔術の心得がある警護員が従者のフォローするものの、そう耐え切れるものではない。

「やーめーてーっ?！」

「ちくしょー！ 転属願いだしてやるー！」

「死んでも遺族手当でねえから、死ぬなよテメーら。予算ねえんだからな」

「隊長のオニー！ アクマー！ マオー！」

「魔王はあっちだ糞つたれっ！」

警護員達の努力と涙によって、二人のじゃれ合いの余波は公園外には一切もれでなかった。

彼ら彼女らはまさに職務を果たしたといえるだろう。

その努力は危険手当という形で報われる。……といいな。

## 魔王と勇者、じゃれあう(後書き)

よく考えたら、初めて戦闘シーンとか書いたのかもしれない  
まあ、戦闘というかじゃれあいだけど

隊長、お願いする

壊滅。

そう表現するのが一番だろう。

二人がじゃれ合った結果、いつもの公園は壊滅した。

地面は陥没していない場所がなく、遊具は軒並み消滅していた。

公園跡地と言われるより爆撃跡地と言われたほうが納得できるほどに、これ以上なくボロボロだった。

そして何故か、累子の指定席になっているベンチだけは無事だった。

二人はそこに座り込み、

「いやー、はっはっはっは。久しぶりに動いたわねー」

「うう、衝動に任せて剣を振るうなんて」

陽気に笑い、落ち込んでいた。

ちなみに、公園以外に被害はない。怪我人もいない。

従者と警護員達が必要……まさしく死に臨ぞむ気持ちで守ったからだ。

そんな彼女彼らは、地面に突っ伏してうめき声を上げている。座り込む元気もないようだ。

そんな彼らに、近所の奥様方が麦茶を配っていた。飲めるようになるには、もう少しかかりそうだが。

「よっし、休憩終わり」

そう言つと累子はベンチから立ち上がり、膝を着く。  
右手を地面に着き、呪文を唱える。

その声は小さく維委にははつきりと聞こえなかったが、とても真剣なものだった。本能的に、邪魔してはいけなさと感じる声。

唱え終わったところで、ようやく声をかける。

「……何をするのですか？」

「うん？ このままだとさ、色々と問題じゃない？」

「そうですね。さっきの子達も、遊び場がなくなると困るでしょう」

「なので、元に戻そうかなーっと、ほい」

軽い掛け声と共に、右手を持ち上げる。

二人のじゃれあいの結果、公園は壊滅した。

そして、累子の魔術により公園は、再生した。  
そう、再生。

何一つ変わらない、壊滅する前と変わらない公園がそこにあった。  
維委が落ちた落とし穴までが再生されていた。

「具現化？ いえ、空間じゃない……時間の逆行？！ ありえないっ！」

従者の悲鳴と、地域住民の歓声が上がる。

累子は手を振って応える。

「今日の対決は凄かったぞー！」

「でも次からは控えめにしてねー！」

イベント扱いされていることにちょっと落ち込んだ維委であるが、非難されることをしながら、そうはならなかったのは累子と従者たちのおかげだと考え直す。

「累子さん、ごめんなさい。そして、ありがとうございます」

「なんのなんの。……私こそごめんねー、さすがにちょっとやりすぎちゃった」

「ちょっと、ですか」

「うん、ちょっと」

累子さんらしいと苦笑する維委。

「私ちょっと、皆の様子みてきますね」

「りょうかーい」

「皆さん、ご苦労様です。そして、ありがとう」

「いえ、責務を果たしただけでございますゆえ」

警護員達の中で唯一元気な隊長が、左手を頭部に当てる形の敬礼をする。

彼は警護員のなかで、唯一魔術が使えないことで有名な男でもあ

った。

他の隊員は木陰から出て敬礼しようとするが、立つことすら出来ない。

それほどまでに魔力を絞りきった隊員達に維委は、そのまま良いと声をかける。

「皆さんが元気になるまで、累子さんといいます。ゆっくりと回復なさってください」

ちなみに従者はというと「…は不可逆だし…でもでも時間塑性分を…いやいやどこに記録があるのよ」と、ぶつぶつ言い続けていたそう。

彼女は一族の例に漏れず、立派な魔術オタクとなっているようだ。

「申し訳ございません殿下。ご好意にすがらせていただきます」

敬礼したままの隊長が応える。維委が知らないから仕方がないが、敬礼は返礼を貰うまで解くわけにいかない。

機転をきかして腕を降ろしても、維委は怒らないどころか、問題とも思わないだろう。

しかし骨の髄まで階級というものを仕込まれた、軍属上がりの隊長は敬礼したまま維委に耳打ちする。

「僭越ながら、意見具申よろしいでありますようか」

「はい。お聞きしますよ？」

隊長の奇妙な言葉使いに、くすくすと笑う維委。

一平卒からのたたき上げな隊長は、上手く回らない舌にイラつきながら言葉を選ぶ。

「我が隊に上級限定、もしくは非限定の魔術師を増員したくありません。御一考をお願いいたします」

王族の警護員とはエリート中のエリートであり、ほぼ全ての隊員が魔術師免許をもっており、最低でも二ヶ国語は話せる。

これは外遊する王族に付き添い、勝手の違う国外での突発事項に対応するための最低限のスキルである。

維委の警護員達の魔術師免許はほとんどが初級非限定で、中級限定者が数名という構成になっている。

こつ聞くと低いように聞こえるが、元々上級というのは、修練と勉強に何十年も励んだ成果である。肉体的な若さが必要な実務者に、そうそういるものでない。

ちなみに、従者は上級限定魔術師免許を持っている。さすがはダークエルフである。

警護員の中に、同様のものがあと二人いれば、ここまで死屍累々にはならなかった筈だと言葉を続ける。

「わかりました。お父様と姉さまが外遊から帰りましたら、お願いしてみます」

「感謝いたします、です」

「ところで、隊長さん」

「なんでありませんようか？」

「いつまで敬礼されているので？」

「……………返礼があるまでであります」

三点リーダー四つ分使った時間で出した隊長の答えは、そのままなものだった。

隊長、お願いする（後書き）

短いを二つ足してマップ  
所謂、説明回ということだ  
というか、冗長にすぎることか

決意、まったり

「……って、言われちゃいました」

近所のおばちゃんから麦茶をもらっていた累子に、維委は隊長とのやり取りを話した。

ちゃんと返礼してもらった隊長は、今はちゃんと左手を下ろして部下の尻を蹴飛ばしていた。さすが元軍属、なかなかスパルタである。

「ちょっと恥ずかしかったです」

人前では王族としての言葉使いをしている維委だが、累子の前では素にもどるようだ。

王族としての言葉使いといっても、維委のそれはかなりフランクではあるが。

「へえ、継命ちゃんは外遊してたんだ。だからかー」

それに対しての累子の応えは、微妙に的を外したものだっただ。

「うーん……静かな日々よ、さようなら？」

「累子さんは姉さまと面識があるのですか？」

「いやー、面識っていうか知り合いついていうかー……」

小首をかしげる維委に、累子は珍しく言葉を濁す。

「まあ、それはともかく」

ぼんと手をたたく。話をすり替えることにしたようだ。

「本当に吹っ切れたみたいねー、誰かに相談したの？」

「……ええ、家族に」

俯きながら話す、完全には吹っ切れていないようだ。

だが迷いはなくなったようで、その目には揺らぎがなかった。

「『自分に出来ないことで悩むより、出来る自分になれるよう努力しよう』と言われました」

「をを、良い事をいう家族だ。維委ちゃんは愛されてるなあ」

「はい。自慢の家族です！」

「私なら『放っておいたらー』とか『どうしようもないってー』としか言わないわよ」

気楽に言い放つ累子。

気楽に言い放ってはいるが、実際には『放っておけなくて』そして『どうしようもなかった』者の言葉である。

維委は、その言葉の重さを理解している。知っている。

「……とりあえずは、世界をこの目で見て周りたいたいと思っています」

それは、狭い視野で正しさを決めてはいけないという、父の言葉。

「何が出来るか、何が出来ないか。出来るならどこまで出来るのかを見極めたいと思います」

「出来ないことは、しない理由にできるが。出来ないままの理由にはならない」そう言った兄。

そして「不可能でないことを、この国、日出の国が証明しているでしょう？」と応えた母。

姉は「したいことをしたいように、好きにやりなさい」と背を押してくれた。

維委は家族の言葉に決意した。決して家族の気持ちを裏切らないと。

世界的に見て例外中の例外。グローバルスタンダードという言葉をもつ向から否定する国。日出の国。

私はそんな国の王女なのだ。勇者として王女として、もっと視野を広げないと、と。

決意した維委に、累子にはいいと笑う。

「うん。私に被害が及ばないように、遠くから応援するわねー」

「いえ、普通に応援してください」

「だって私、魔王だもん」

二人はちよつと見合ったあと、どちらともなく声をだして笑った。

「時間制御できれば空間はどうとでも出来るの？…でも今だけな

く過去との相違差…識外での総合？ アカシツ…いやいやいやないないない」

従者はいまだにぶつぶつと、自分の殻にこもって咳いていた。  
そろそろ戻って来い。

決意、まったり（後書き）

継命は「つぐみ」と読みます

最後に従者が呟いている内容は、  
中二病も難しいもんだ  
適当です

## 兄、参上（前編）

「ここですか」

「はい、間違いありません」

ボロいアパートの前で住所を確認するのは、黒髪黒目というこの国ではもつとも多い、スーツ姿の普通の人族男性。すこし目が釣りあがっており、きつそうな顔をしている。

それに頷くのは、黒髪黒目は同じだが、かもし出す雰囲気がかまったく違う眉目秀麗な青年。

「では参りましょう」

錆た階段を軋ませながら昇り、いまだき見ないような呼び鈴を押し、出てきたジャージ姿の女性に尋ねる。

「黒岩累子さんはご在宅でしょうか？」

「私ですけど……なにか？」

「私は37代目筆頭勇者、天王経盟と申します。突然の訪問、無礼ではあり」

「人違いです」

口上途中でドアが閉められた。

「……………」

「……………」

「ふむ、人違いでしたか」

「違ってません、『くろいわ るいこ』とあります。殿下のお話を遮るとは、なんとという無礼な振る舞いでしょうか!」

スーツ従者は更に「殿下の訪問を断るとは許せません!」と呼び鈴を連打し始める。

呼び鈴が身悶えるようにジイジイジイジイと、かすれた電子音を鳴らす。

筆頭勇者と名乗った経盟が「失礼ですよ」と止めようとする前に、扉が勢い良く開かれた。

「もっと早く出てきたまえ。恐れ多くも」

細腕が従者を殴り飛ばした。

またしても口上途中だった。

「ぶぎゃらっ?」

細腕といっても、トラックを持ち上げれる細腕である。

従者は二回転しながら柵を飛び越え、自転車置き場の屋根に激突した。

「うーるーさーいー」

軽くウェーブがかった赤髪ごと頭をかきながら、アパートの通路に出てきた累子は、経盟に視線をやると表札の下を指差した。そこには墨痕淋漓と「勇者お断り！」の但し書きが合った。

「これ見えないのー？ 盲目なのー？」

今日は機嫌が悪いらしい。目が据わっている。

目の下に隈が出来ている、どうやら寝不足のようだ。

「見えておりますが、今日は維委の兄として来ましたので。御寛恕願います」

「……なら、勇者うんぬん言うべきじゃないよねー」

「嘘は論外としても、真実を語らないのは不誠実だと思いませんか」  
経盟はさわやかな笑顔でいきった。

累子の不機嫌オーラも、彼には通用しないらしい。

「まあいいわ。玄関先での立ち話もなんだし、はいりなさいな」

「はい。ありがたくお邪魔させていただきます」

階下でのびているスーツ従者に「あなたはそこで正座ね」と言い捨てた累子に続いて、経盟も部屋に入る。

一礼してから入室し、靴もしつかりと並べる。

動作の一つ一つが洗練されている、まさしく王子様といった感がある。

「改めて自己紹介させていただきます。天王家次期当主37代目筆

頭勇者にして、維委の兄の天王経盟です。いつも妹がお世話になっております」

「魔王とか色々やってる黒岩累子よ。維委ちゃんとは友達だから、気にしなくてもいいわよ」

累子は応えながら、ちゃぶ台前で正座している経盟の前にグラスを置く。中身はただの水道水。

経盟は笑顔で「いただきます」と口をつけた。

女性向け雑誌の表紙を飾ったこともあるさわやかな笑顔は、それでも崩れなかった。

内心はわからないが、それを表に出さないだけの技量はあるらしい。

「で、今日は何用かしら？」

「お礼と、幾つか御教授願いたいことがございます」

「教授つつつたて、私は先生でもなんでもないけどね」

「あと。詰まらないものですが」

後ろ手から紙袋を取り出す。それはいつぞやの、維委が手土産として持ってきた焼き菓子だった。

「妹からこれが好きだと聞きました、用意させていただきました」

「なんでも聞いて頂戴」

あっさり買収された。

「それでは遠慮なく」

はりついた笑顔はそのまま、経盟は担当直入に切り出した。

「何故に勇者をそのままにしているのですか？」

口元に白い歯をみせた、さわやかな笑顔。

しかし、その目には殺気とも言うべきものが宿っていた。

累子はそういったものに一切反応せず、頭をかいた。

「……筆頭勇者ってーことは、鏡を継いでるのよねー？」

「はい、忌まわしいことながら」

「なら、鏡に聞きなさいよ。知っているんでしょう、それが勇者の一部だって」

兄、参上（前編）（後書き）

長くなったので、前後編に  
後編も近いうちにアップします

天王経盟は てんのう けいめい です  
名前付けセンス？ ありませんよ、そんなもの

## 兄、参上（後編）

勇者、それは魔を打ち払い人々に希望をもたらすもの。

しかしその実態は、絶望の中で産み落とされた、希望という呪い。

まずそれは、人をやめることから始まる。

人は弱い。

牙もなく爪もない。

ちよつとした怪我や病気ですぐに死んでしまう。

だから、人と言えなくなるほどに強化する。

皮膚を丈夫にし、骨は硬く、血を濃くし、筋肉はより絞り込まれ、神経は空気の色が見えるほどに研ぎ澄まされる。

次は魔力だ。

魔王は真竜を超えるほどの魔力を持つ。それはそのまま放つだけでも、鉄壁の魔力障壁となる。

それを超えて魔王に術や剣を届かせるためには、同様同質の魔力が必要となる。

人は小さい。

膨大な魔力に、人の小さい魂が耐え切れない。

ならば、と悪魔のような考えが採用された。

魂が耐え切れないのであれば、魂そのものを魔力に変換すればよいと。

最後が技だ。

知識は蓄積できる。だが技術はそうは行かない。

習得に10年かかる技術は、受け継ぐにもやはり10年の歳月を必要とする。

特にそれが個人の才能によるところが大きい、武術や魔術なら尚更である。

人は儂い。

経験、技術、そういった記憶。それらを魂ごと複写し次に渡す、転写する。

死してなお現世に留める魂の牢獄。

聡明な人なら判るだろう。

この勇者というシステムは、個人を対象としたものではない。

魔王は個人で国と戦える。百人いても万人いても敵わない。

しかし百代ならば？

先人が捨石となって、踏み台となって、歴代の勇者の屍を階段として、人が魔王に歩み寄るためのものだ。

これらの魔術、呪術を完成させ、発動させるための器具が作られた。

人の限界を超えるよう、根源から身体を作り変える剣。

魔王を超える魔術を行使できるよう、魔力を貯め続け、魂すらも魔力に変換する勾玉。

そして勇者という呪いの根幹を成す、疑似転生術、魂の記憶と転写を行う鏡。

これら三つの呪具を持ち、魔王と戦う者。

人族にのこされた最後の希望、最高戦力。

それが勇者。

勇者の一族。

「何が勇者ですか、こんな……呪いというにもおぞましますすぎるシス

テムなんて」

血がにじむほどに唇をかみ締める。

「自ら選んだのであればまだ納得も出来ませぬ。それが必要な世であれば、得心も出来ませぬ。でも……維委も継命もただの女の子なんですよっ！」

心のうちを一気に吐き出す。

「たしかに立場もあります、普通におしゃれして友達と遊びに言ってもいいはずなんです。なのに！　なのに勇者の家系というだけで、こんな重荷を負わすなんて……。あの子には、いままで　友達がいないかったですよ。軽く触れるだけでも、それだけで他人には耐えられない。小さいこの維委は、僕にすら触れようとしなかったんですよっ！　家族なのに、手をつなぐことも出来ないなんてっ！　！」

軽く握るだけで鉄棒が曲がる、走れば音速を超える。どんな魔物でもそんな事は出来ない。人族の、それも子供ならなおさら不気味に映るだろう。

人は異質なものを鋭く嗅ぎ分ける、そして排除する。自分を、集団を護るために。

幼いころの維委は、自分でその異常さを理解してから、力を加減できるようになるまで、一切誰とも接触をとろうとしなかった。人を傷つけるのがいやだったから。

「あの子は優しい子だから……いまでも、甘えようとしません。家族なのに……」

経盟の眦に光るものがあつたが、それはそれ以上あふれることはなかった。

王族は泣くことを許されない。

誰かのために泣くということは、鼻屑になるから。泣くのならば、全臣民のために泣かなければならない。

でもそれは不可能だ。誰とも知らない者のために泣くことなど出来やしない。

だから、涙を流さずに泣く術を身に着ける。

「何故に勇者を残すのですかっ!?!」

彼は心の奥で泣いて、激高する。妹たちの未来を憂い、勇者という存在に怒りを覚えるから。

気持ちの悪いものが、心の底に沈殿していく。

「……孝美が望んで、私が認めたからよ。勇者を残すって」

小さく弱く儂い人族の尖兵となって、魔王と魔族を滅ぼすよう願われた。

希望という願いの脅迫。

それを聞き入れた日出の国の女王。

初代勇者、天王孝美。

「あなたは憶えてないだろうけれど、私は言ったのよ、ちゃんど。

『世界の半分をあげるから、そんな呪いはすてちゃいなさい』って」

身の内にある熱く粘度の高いものを隠そうとしない経盟と違い、累子は実にあっさりとしている。

「ああそっいえば、維委ちゃんはそっくりなのよね。あの子と。ち

よつとドジなところか」

「いえ、憶えていますよ。知っています」

確かに経盟は歴代の勇者の記憶を、全部ではないが引き継いでいる。鏡を継承している。

勇者という呪いが子々孫々まで絡みつく恐怖と、それでも決断せざるをえなかった記憶を。

母親としての愛と、女王としての義務。それらが混ざり合った苦い記憶を。

「あなたさえその気なら、いくらでも勇者なんて殺せるはずだ」

「勇者の血筋につながる者、全てを殺せって？」

累子の眉が、ピクリと動く。

「殺さなくても、三種の神器全てを壊すことぐらいたやすいでしょう。何故今まで放っておかれたんですか」

そういつて経盟は、懐から少し大きめのお守りを取り出し、袋を開けた。

丸いそれは、神器という名から創造できないほど小さな鏡。

それをちやぶ台に乗せる。

「今からでも遅くはありません。勇者という呪いを完膚なきまでに無くしてください。どうぞ亡くしてください」

失くしてください。

そういつと経盟は土下座した。

彼の立場では一生することはない、してはいけない行為。

動作の一つ一つが洗練されていた今までのとは違い、なんとも不器用で見苦しい土下座。

しかしだからこそ、本心からの嘆願だとわかる。

「何か勘違いしてない？」

「……何がでしょうか」

嘆息し、ほんの少しだけ姿勢を整える。

「あなた達一族が引き受けたことです、最後まで責任をとりなさい」

手を膝に置き、凜と背を伸ばす。

目は貫くように経盟を捕らえている。

「経盟。あなた個人の感傷は、先人達の願いを踏みにじる理由に足りません。孝美から続く、歴代の記憶があるのなら、わかるでしょう」

対する経盟は無言。

「憶えていませんか」

「……『日出の国に平穏と安寧を』」

「ならば勇者という呪いに屈するのではなく、それを利用することを考えなさい。その方法はあなたに継がれているはずです」

「……『勇者としての力を切り札として、見せ札として利用せよ』」

「孝美は私にこう言いました『みんなが笑顔で暮らせる国を作りたいです』と」

「『協力してくれませんか、魔王さん。私は息子の笑顔が好物なんです』……でしたね」

累子はひとつため息をついたあと、ぼりぼりと軽くウエーブがかった赤髪ごと頭をかいた。

足を崩し「憶えてるじゃない」と呟く。

顔を上げた経盟は「はい」と返す。その顔は、またさわやかな笑顔に戻っていた。笑顔の中には、先ほどのドロドロとしたものは感じられなかった。

もしかして試された？ 累子はそう思ったが、良しとした。

シリアスマードはしんどいのだ。

「みーんな私に、なんやかんやお願いしてくるけど、私は神さまじゃないのよー？ ちよつと不老不死で最強なだけで」

「私達は小さく弱く儂く揺らぎやすいのです。巨木があれば、すがりたくなるのが人心です」

「めんどくさいわねー……。ま、困ったことができたら言いに来なさいな、愚痴ぐらい聞いてあげる」

「助言、助力はいただけないので？」

苦笑する経盟。彼は少し困った表情というのが良く似合う。うすっぺらい笑顔よりよほど味がある。

「助言ねえ」

玄関ドアが強く叩かれる。

「……助力なら、今、私が欲しいかも？」

兄、参上（後編）（後書き）

初代勇者は、そのまま たかみ と読みます  
天王孝美、モデルなし

上手くまとめる文才が欲しい

## 姉参上、そして退場

「おねえーさまああー！ 継命はいま戻ってまいりましたーっ！  
開けてくださいおねえーさまあああああー！」

「継命？ 何故にここへ」

予想外の訪問者に、動揺する経盟。

しかし累子は嘆息一つしたあとに窓を開け、経盟に「そこをどけ」と手を振る。

「ただいま留守にしております、30秒以内に回れ右して帰ってください」

堂々とした居留守もあつたものである。

「留守なら仕方ありません……って、そんなわけないでしょうがあああっ！」

ノリツッコミしながら勢い良く入室したのは、黒髪の縦ロールという斬新なセンスをもった、経盟や維委と良く似た顔立ちの女性。  
経盟の妹で維委の姉、縦ロールとフリルな37代目ゴスロリ勇者の天王継命その人だった。

累子は勢い良く突撃してきた継命を受け止めつつ、そのまま継命を窓の外に投げ捨てた。

「そおいつ」

「きゃあああああつ」

「えええええええつ?!」

目の前を、妹が飛んでいくというあまりない状況に叫ぶ経盟。すぐに立ち上がり、窓の下を覗き込もうとする。

「継命、大丈夫か継命っ!？」

「あらお兄様、どうしてここにおられるの?」

ひょいっと窓から落ちたはずの継命が顔をだして、首をかしげた。

「……無事ならいいんだ。うん、無事でよかった」

色々と言いたいことや疑問もあったが、それで良しとしたらしい。

「維委がお世話になってるというのでね、お礼にきたんだよ。そういう継命こそなぜ黒岩さんのところへ?」

「決まっていますわ。マジカル近代兵器魔術を習いに来ましたの」

マジカル? 兵器? いや、魔術? もう、何もかもについていけなくなりつつある経盟を無視し、フリルが幾重にもかさなった重そうなスカートを抑えながら、窓からはいる継命。空を飛びながら再度累子に突撃する。

「継命は戻ってまいりましたわ、お姉さまあ!」

「そおいつ」

「きゃあああああつ」

開きっぱなしの玄関から放り出された。

「ああ、これが天井というやつですね」

今度は驚愕することはなかったが、頭のどこかが現実逃避しているらしい。

お笑い用語にも詳しい王位継承者というのも、きつと珍しいに違いない。

「で、マジカル近代兵器魔術とは何でしょうか」

「……うーん、説明しないとだめー？」

「可能であればお願いいたします。継命がこだわる魔術は、基本的におかしいものが多いですから」

「おかしくなどありません。素敵に近代兵器を模倣したマジカルな魔術ですもの」

おかしくない箇所がないほどにおかしいと思う。

「……玄関から放り出したのに」

「何故かまた窓から入ってくるんだい、継命。きちんとドアから入ってきたさい」

「また放り出されないようにですわ」

「普通に玄関から入ってきたら、追い出さないわよー」

「……入れてくれませんのに」

「いや、僕は入れてもらえたよ」

「卑怯ですわ、お兄さまのくせにっ!」

「仲いいのはいいけれどー。二人とも」

「お兄さまのくせに、というのも凄い台詞だね、継命。ここは『さすがですわ、お兄さま』とかじゃないのかい?」

「お姉さまのお部屋に侵入するお兄さまには、変態という称号をさしあげますわ」

「私の部屋で喧嘩はー」

「礼儀の正しさは、どんなときでも有効かつ必要ということだよ。継命はもう少し淑女らしくしたほうがいいね」

「私は立派なレディですわよ。淑女たれと押し付けるのは、殿方として狭量ではなくて?」

「……………」

「淑女は男性に変態という称号をつけないものだよ」

「あらあら気になさっていたのですね。ですが変態であることは隠せませんよ、お兄さま」

「そいつそおいつー!」

「きゃあああああつ」

「えええええええつ」

右手で経盟を、左手で継命をひつつかみ、投げ捨てる。二人は悲鳴を上げつつ、見事玄関から放り出された。

「よし。二人とも二度とうちにくるな」

そう言った後、累子は玄関にも窓にも遮蔽結界を張り、鍵をかけた。

「お姉さまは本当にいけずですわ」

「いや、今のは僕たちがいけないだろう」

継命は口を尖らせて、経盟は肩をすくめる。

「しかしおかげで、迷惑をかけたお詫びにくるといふ選択肢が増えた。それを喜ぼう」

「抜け駆けは許しませんことよ、お兄さま」

「しないよそんなことは。マジカル近代兵器魔術には興味があるけれど」

「口調が昔のものに戻るほど、心を許しているのに。ですか」

「……そうだったかい？」

「『僕』と言っていましたわよ。私は嬉しかったですわ」

「気をつけよう」

「お兄さまもいけずですわね、本当に」

「……殿下がた」

二人の会話を、弱った声がさえぎる。

「私はいつまでこうしておればよろしいのでしょうか……」

それは累子の言いつけどおり、正座していたスーツ従者だった。

「さすがにもういいだろう。私も追い出されてしまったしな」

「あら、まだいましたの」

二人にそういわれてもスーツ従者は額の汗をぬぐうだけで、立とうとはしなかった。

「……どうしましたの、帰りますわよ」

「恥ずかしながら……足がしびれて、立てません」

「ぷっ」

いつもしかめ面をし、いかにも仕事が出来ますオーラを放っていたスーツ従者。

それが弱った顔をして弱音を吐く、とても珍しい状況に継命はついふきだしてしまった。

「笑ってはいけないよ継命……くく」

「お兄さまですわ」

そういつて継命は、スーツ従者に手を貸す。

経盟はそれを見て、和んでいる。

「……ねえ、お兄さま」

「なんだい」

「私は、昔のお兄さまのほうが好きですの。もう、その仮面をかぶるのはやめにしませんこと?」

「そうだな……いや、『僕』に戻るのは、まだ早いな」

手を無理やり引っ張られ、文句を言うべきか感謝すべきかを迷うスーツ従者を横目に呟く。

「色々、やるべきことがあるからな」

姉参上、そして退場（後書き）

もう一度名前の読み方

経盟 けいめい

継命 つぐみ

維委 いい

です

今回は会話劇になるよう、兄妹のところだけだけど、「」を私としてはかなり多めに使用しています

が  
バランスが難しい

慣れないことはしないことだと悟りました

（「人」）なむう

## 維委、その一日（前編）

05:30起床

「……おはようございます」

もともと広いが、家具が少ない性で更に広く感じる私室で、誰に言つとでもなく挨拶をする維委。

起きたかどうかの自分なりの確認、毎朝の儀式のようなもの。

勇者の剣が定位置にあるのを確認してから、そのままフラフラと続きの浴室へと向かう。

ぬるま湯で長い黒髪を洗っているうちに眠気に誘われたが、ガンン。

朝の沐浴が終わり制服に着替えていると、時間を見計らった従者がノックする。

「姫様。朝食の用意が出来てございます」

「わかりました。すぐに行きます」

髪をリボンでくくり、今日はサイドアップにする。

たまに同級生がしているシュシュが欲しくなるものの、ため息をつけてガマンする。

王族に計上される予算は莫大だが、個人的な予算、所謂お小遣いは実は一般庶民より少ないから。

07:00朝食

「おはようございます、お母さま、お兄さま」

こんまりとはしているものの、格調高く歴史を感じさせる王族専用の食堂で家族がそろつ。

「おはよう維委。良く寝れた？」

「おはよう維委。今日もいい天気だよ」

視察や外遊、儀式に講演等々で忙しい王族だからこそ、食事は出来るだけ一緒にとるようにしている。

これは維委の母親、初めて民間から嫁いだ多佳子の希望がかなえられた形である。

質素ながらも選別された素材を使い、手の込んだ朝食を三人で摂る。

給仕もいなく気軽な食事風景であるが、そこに会話は無い。マナーだから。

でも個人的には、お喋りしながらの食事がしたいと思う維委であった。

「維委さん。今日は継命さんも帰ってきますから、晩御飯は楽しく食べましょうね」

「！はい、お母さま」

維委の気持ちを察した多佳子が食後の紅茶を楽しみながら、のんびりと笑いかける。

「お母さまは維委に甘すぎると思いますよ」

「いいじゃない。家族なんだし、甘くても」

「私はそうは思いませんが」

コーヒーの香りを楽しむ経盟は、口を尖らせる多佳子に肩をすくめて応える。

いつものやり取りに維委のほほが自然とほころんだ。

07:50 登校

公共機関を利用して登校。商店街で開店準備中の、顔見知りには挨拶して通る。

当然、従者が側にいる。警護員達もそろそろ着いて歩く。ちょっとした大名行列である。

いまではカルガモ親子並みの朝の名物になっていた。

08:40 学校到着

警護員達は所定の場所へ移動、従者も控え室へ、維委は一人で教室に向かう。

「みなさん、おはようございます」

「あ、姫様おはようー」

「おはようございますー」

クラスメイトに挨拶すると、素直に返事が返ってくる。が、どこか余所余所しい。

クラスメイトが余所余所しいにはわけがある。

王族が通う学校である。持ち物検査は授業に必要な物をチェックするのでなく、危険物を持ち込まないかどうかをチェックする。それにタブーや怠慢等なく、折り畳み傘も開き、筆箱もチェックされる。年頃の女の子にはとても恥ずかしいことだが、秘密のポーチも開けられてしまう。

自分で選んだ進路とはいえ、毎日毎日行われると、慣れるより厄介と思ってしまう。

その元凶とは、そうそう仲良く出来ない。いつもの事ながら、すこし悲しくなる。

08:50 ホームルーム

特に問題なく、担任から連絡事項が伝えられる。

維委のクラスの担任は、初老に入りつつある人族男性。

長いひげが特徴で、生徒からは仙人というあだ名が付けられている。

09:00 授業開始

午前中は現国・物理・歴史・体育である。

体育は見学したが、それ以外は特に何もなく終了。内職などせず真面目に授業を受ける。

12：50 昼休み

「本日は卵焼きとソーセージ。から揚げにはレモンがかかっています。デザートはウサさんりんごです」

専用の控え室で、従者からお弁当を受け取る。

従者が側に控え、維委は一人で昼食を摂る。とても美味しいが、ちょっと寂しい。

クラスメイトと和気藹々と食事したいが、警備上の観点から却下されている。友達といえるほどの相手もないし。

官立御門院高等学校には豪勢な食堂もあるが、安全性を考えてのお弁当なわけだ。

予算は莫大にあるが、無尽蔵ではない。食堂のおばちゃんたちまで雇う余裕はないのだ。

それにお弁当も中々楽しい。だって箱がクマちゃんだぜ。

13：45 午後の授業開始

数学（幾何）と古文。

それなりに優秀な維委、特に問題なく終了。

15：35 下校

部活動が推奨されているが、維委の身体機能では運動部に参加できない。

維委の運動能力は、アスリートどころか人間の範疇を余裕でぶちぎっているから。

なら文科系かというと。実はとても不器用かつ、ちょっと脳筋は

いつている維委は、体験入部した部全てからお断りされていた。

「今日は黒岩様のところに向かわれないのですか？」

側の従者が尋ねる。

最近はこのまま、もしくはいったん帰ってから鎧を身に付けて、魔王へ挑戦するのが日課になっている。

「いえ。今日は寝不足でしょうから、今日はこのまま帰ります」

「寝不足、ですか？」

「はい。お知り合いが『愛は地球を救う25時間TV』に出演する  
そう、徹夜予定だと昨日おっしゃっていましたから」

「……………」

「似合わない。そう思っていますね」

「顔にでていましたか……………気をつけます」

「いえ。累子さんも『愛で地球救えるわけないじゃん』とか『金  
よこせていつてるタレントがギャラ貰ってる』とか『制作費4  
0億で募金10億』とか皮肉をいつていましたから」

「はあ」

「私は、それほど嫌いではないのですけどね」

苦笑しながら続ける。

「しない善よりする偽善という言葉もありますし」

「小さな親切大きなお世話、という言葉もございますよ」

「難しいものですね」

ちなみに、その累子の知り合いは深夜に10分間出て、笑いもとれずに退場させられたらしい。

若手芸人といえども、少し可哀想。

維委、その一日（前編）（後書き）

長くなったので前後に分けました

折りたたみ傘までしらべられるのは、体験談です  
私の場合は皇太子ご夫妻がこられた時の話ですけれど  
出入りするたびに調べられて、めんどくさかったです

24時間TVは、別に嫌いではないです  
好きでもないですが

視聴者や募金者は余剰金で免罪符が買えて  
スポンサーは高い視聴率で広告効果狙えますし  
TV局はイメージアップ狙えますし  
いわゆるWin-Winの関係ですしねー

まあ、見ませんが

維委、その一日（後編）

16:30 帰宅

「おかえりなさいませ。 維委さま」

古きよき紳士然とした執事が、維委を出迎える。

この家だけは時代が止まったように、昔ながらのやり方で通されている。

「経盟さま、 継命さまもお帰りになっております」

その象徴が執事である。 彼の家は先祖代々天王家に仕えており、それを誇りにしている。

先代の天王家当主が時代錯誤だと、役目をなくそうとしたのだが「ならば死を承りたく存じます」と拒否された。

彼の息子も跡を継ぐべく、庭職人から修行をしている。

何故庭職人からの修行なのか、それは彼ら執事の一族にしかわからない。

「ああ、もうまったく。 疲れましたわ」

「自業自得というべきだね、それは」

「お帰りなさい、お姉さま。 欧州はいかがでしたか？」

「ただいま維委。もう、くったくたですわ」

「だからそれは君自身の所為だろう」

「お兄さまは本当にいけずですわ」

「????」

いったん自室戻り室内着……といってもそれなりの服装だが……に着替えた維委は、ティーサロンで兄姉と久しぶりの会話を楽しんだ。

正直判らないところもあったが、姉から聞く異国の話は維委を喜ばせ。冷静な兄による突っ込みに笑ったりもした。

「私もいつか外国に行きたいです」

天王の血に繋がる一族は、渡航制限がある。維委は一度も日出の国から出たことがない。

「めんどくさいですよ。制限も色々ありますし、手錠をかけられますし」

「手錠っ！ 何をしたんですかお姉さまっ？」

「手錠でなく魔術制限用の腕輪だろう、継命。意図的に勘違いさせるのは良くないな」

天王の一族は勇者の一族。人類最高戦力、それは戦略兵器と同じ。「ちよつとそこまで」そんな気分で渡航など出来やしない。

渡航するときは、全て政治的意向が絡む。政府の尻拭いをするこ

ともある。

渡航が決定しても、周辺諸国に滞在理由と期間を説明し、軍事的緊張を起こさないようにする必要がある。

継命の場合は、その魔術を抑えるための腕輪の着用を義務付けられた。

欧州各王室への親善旅行中、常に着けていたわけだが、それは継命にとって拷問に等しいものだった。

累子に対するテンションの高さも、腕輪をはずせた嬉しさが追加されたものと思えば……それでも行き過ぎか。

「手錠と同じですわよ。お兄さまも感じてみるといいですわ、あんながんじがらめに遮断される感覚を」

「私は君ほど魔術の才能がなくてね。いつも遮断されているようなものさ」

「維委なら足枷ですわね。お兄さまは……首輪？」

「……外国に行きたくなってきました」

「一国の代表に、首輪や足枷はないだろうに……」

久しぶりの兄妹の時間は楽しく、すぐに過ぎ去ってしまった。

19:00夕食

朝食時とは違い、多佳子が言ったとおりになぎやかな食事となった。

広い庭での立食野外パーティ……ぶっちゃけバーベキューである。

「……いつのつていいよねー」

そして何故かいる累子。肉野菜肉野菜肉とビール片手に、串に喰らいついている。

「……累子さん、いつの間に」

「私が呼んだの」

「お母さま、お知り合いですの?!」

維委と継命の声が重なる。

「昔、師事してたのよ。ねえ、お師匠さま」

「良い弟子を持ったと実感してるわー。肉肉野菜にくー」

「お師匠さまは、相変わらず健啖家ですわね」

「そんなお姉さまも素敵……というわけで、私も弟子に!」

「だが断る」

「お姉さまのいけずー!」

「継命お姉さまも知り合いですの?」

「私が紹介したの。継命から、私の師匠に教わりたいてって」

「今上陛下もお知り合いましたよ」

従者がドリンクを持ってきながら耳打ちする。

「気付けば家族ぐるみの付き合いですか？」

「That's right! にくー」

21:00 予習復習

にぎやかなまま夕食は終わり、明日の予習復習をする維季。まじめだ。

23:00 就寝

入浴も終え、パジャマに着替えて机に向かう。

パーティー最後の、累子・多佳子・継命による魔術大会を思い出しながら笑う。

中止しようとする経盟を、酔っ払った累子が圧縮衝撃弾を放ち、多佳子が顔に落書きしたのだ。

明日の朝はきつと経盟の絶叫が響き渡るに違いない、だって油性ペンで描かれてたから。

日記も書き終わり、ベッドに潜り込む。

「おやすみなさ」

日記の最後の一行には『今日も楽しい一日でした』と書かれていた。

おやすみなさい。

維委、その一日（後編）（後書き）

メイド萌えー執事燃えー

でもメイドはまだ出してなかったっけか  
今度出そう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5809u/>

---

ありがちな魔王と勇者の日常とかそんなの

2011年9月9日23時49分発行